

世界システム論とグローバリズム

—近代世界システム概念の吟味—

熊 岡 洋 一

目次

はじめに

1. 近代および資本主義概念の古典的見解
2. 近代化論と世界システム論
3. I.ウォーラステインと S.アミンの近代世界システム概念
4. A. G.フランクの世界システム論

むすび

はじめに

1997年タイの通貨バートの暴落に始まったアジア危機の翌年、1998年にアンドレ・グンター・フランクは *ReORIENT: Global Economy in the Asian Age* (A. G. フランク/山下範久訳『リオリエント—アジア時代のグローバル・エコノミー—』藤原書店 2000年) を出版し、自らの世界システム論を展開しつつ、21世紀がアジアの時代となることを予見した。フランクの世界システム論は、イマニュエル・ウォーラステインらの世界システム論の批判をも含むものだが、ウォーラステインもまた「21世紀はアジアの世紀」(日本経済新聞2004年8月11日朝刊)との認識を改めて述べている。過去30~40年間にわたり展開されてきた歴史理論としての世界システム論における二人の巨匠が同じ予見を行っていることが感慨深い。

世界システム論的認識によれば、現代世界経済は北米・EU・東アジア(東北および東南アジア)という3極への集中傾向を示しているという。そしてこれら3極の動向を歴史的にまた社会科学的に分析しようとする場合、主として欧米を分析対

象として形成されてきた既存の理論や概念では不十分であることがしばしば指摘されている。そこで本稿ではこれらの世界システム論の成果を踏まえて、改めて近代とは何か、資本主義とは何かについて概念の吟味を行う。具体的には第1に主として19世紀までに形成された古典的見解、第2に第2次世界大戦後「東西冷戦」下に形成されたアメリカ流の近代化論およびマルクス主義史学における見解、第3に世界システム論における見解について検討する。

1. 近代および資本主義概念の古典的見解

近代とは何か。まず用語の問題としてみると、例えば『広辞苑—第3版—』には「①今に近い時代。近ごろ。② (modern age) 歴史の時代区分の一つ。」とある。因みに現代の項目をみると「①現在の時代。今の世。」とあるから、①の意味では近代とは現在より少し前の時代を指している。②の意味では、つまり「歴史の時代区分の一」としての近代とは modern age という英語 (ヨーロッパ語) の訳語である。それでは modern とは何か。OED には 'of the present and recent times' (今および近ごろの時代) とあり、その語源はラテン語の modo (ちょうど今) とある。日本語では近代と現代は区別されているが、modern は両者を区別しておらず、『広辞苑』の現代および近代を意味している。

この用語法の違いは歴史の時代区分としての近代つまり近代史の概念を見るといっそうはっきりしている。西洋史の時代区分は基本的には古代、中世、近代に分けられている。古代以前の人類誕生の時代は「有史以前」prehistoryの時代として扱われる。従って歴史時代とは、文字使用後の文明化された時代を指している。近代史 modern history とは中世 the Middle Ages に続く時代の歴史であり、中世史 medieval history とは文字通り「中間の時代の」歴史であり、通説的には476年西ローマ帝国の滅亡からルネッサンスまでの時代であり、古代史 ancient history とは西ローマ帝国滅亡までの歴史である。ヨーロッパ史では、古代は特に古典古代としてのギリシャ・ローマを意味している。英語やフランス語で古代人 the ancients, les anciens とは特にギリシャ・ローマ人を指している。そして近代の始まりはルネッサンス Renaissance つまり古典古代の価値観の「復興」に求められた。中世は

暗黒時代 Dark Ages と見なされ、それ故近代とは暗黒に理性の光を点すことすなわち啓蒙 enlightenment を意味したといわれる。

非ヨーロッパ世界の歴史にも、ちょうど西暦がそうであるように、現在ではこのヨーロッパ的時代区分が普及している。それはヨーロッパ（西ヨーロッパ）が近代世界を制圧したためと考えられる。ヨーロッパ起源の歴史学が非ヨーロッパ世界に導入された結果、そこでは近代、中世、古代という時代区分が自国の歴史に当てはめられた。例えば日本史の場合、『広辞苑』に拠ると、概略以下の通りである。古代とは（大和朝廷時代を含めて）奈良・平安時代をいう。中世とは12世紀鎌倉幕府の成立（1192年）から17世紀初め江戸幕府の確立までをいう。近世とは、広義には近代と同義だが、狭義には、近代と区別して、江戸時代をいう。近代とは明治維新から太平洋戦争の終結までとするのが通説であり、現代とは太平洋戦争の敗北以降現在までをいう。

このようにみてくると、ヨーロッパ史と日本史の時代区分上で特に注目されることは、近代の期間の違いについてである。先に述べたようにヨーロッパ史の近代はルネッサンス期から現在に至る500年を超える期間を意味するが、日本史の近代は現代を含めてもわずか150年にも満たない期間である。おそらくこの落差をカバーするために、日本史では近世というヨーロッパ史にはない時代区分が導入されたと思われる。なお early modern を近世と訳し、近代と訳語を区別する場合がある。しかし、ヨーロッパ史では early modern は modern の一部であって別の概念ではない。

以上近代概念の教科書的・古典的意味合いを述べたが、同時に近代という時代は経済的には資本主義の時代として論じられてきた。資本主義という概念が形成されたのは、啓蒙主義や自然科学の影響を受けて、18世紀後半のイギリスやフランスなど当時の資本主義の先進国に社会科学の1専門分野として経済学＝古典派経済学が成立した後のことである。アダム・スミスは1776年に『諸国民の富』を刊行したが、彼が分析の対象としたものは、彼の時代の「文明社会」すなわち18世紀後半のアメリカなど植民地を含むヨーロッパ諸社会であり、それは現在の用語法でいう資本主義世界（諸社会）である⁽¹⁾。

19世紀後半になると古典派経済学の批判的継承者の一つとして1国史的な視点に

立つドイツ歴史学派およびその後の新歴史学派経済学が形成され、国民経済としての資本主義が論じられた。その代表的な見解としてヴェルナー・ゾンバルト『近代資本主義』（1916年刊）についてみると、彼はヨーロッパ経済の全発展をまず前資本主義時代と資本主義時代に大別し、後者をさらに初期資本主義→高度資本主義→後期資本主義という三つの時代に区分した。そして資本主義をヨーロッパ諸国民の近代社会に固有な経済体制 *Wirtschaftssystem* としてとらえ、その本質的特徴は流通経済組織にあり、その内部では経済主体＝生産手段の所有者と経済客体＝労働者が市場を介して協同し、その両者の関係を支配しているものは営利主義と経済的合理主義である、と彼は捉えた⁽²⁾。

19世紀後半における古典派経済学のもう一つの批判的継承者として、カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスの史的唯物論が展開され、『資本論』（第1巻1867年、第2巻1885年、第3巻1894年、第4巻1905-10年）が刊行され、いわゆるマルクス経済学が形成された。

マルクスにとって人類の歴史の段階区分は根本的には各社会の物質的生産の水準によって、すなわち生産様式の発展段階としてなされる。「大づかみにいって、アジア的、古代的、封建的および近代ブルジョア的生産様式が経済的社会構成のあいづぐ諸時期として表示されうる」⁽³⁾。マルクスは資本主義を近代固有の世界的な経済体制とみている。その本質的特徴は流通組織ではなく生産様式にあり、資本主義的生産様式の特徴は、商品生産を一般的基礎とし、しかもそれは生産手段の所有者＝資本家が賃金労働者を雇って商品生産を行う点にある。

また資本主義の起源に関しては資本の原始的蓄積論がある。すなわち、西ヨーロッパの中世（＝封建制）後期における内発的な「小生産者の発展」と15世紀末以来の大航海時代の開始とともに「資本主義的生産の時代の曙光」（16世紀半からの「資本主義のマニユファクチュア時代」）を迎え、「全地球を舞台とするヨーロッパ諸国

-
- (1) アダム・スミス（大内兵衛・松川七郎訳）『諸国民の富』岩波文庫版 全5巻 1959-66年
 - (2) ゾンバルト（岡崎次郎訳）『近世資本主義』生活文化社 第1巻2分冊 1942年（Werner Sombart; *Der moderne Kapitalismus. 3Bde. 1916.*）
 - (3) カール・マルクス（マルクス＝レーニン主義研究所訳）『経済学批判』大月文庫版 1953年 10ページ

の商業戦」に続くイギリス産業革命を経て、19世紀前半までにイギリスでは「生産者と生産手段の根底的分離」（＝原始的蓄積過程の完了）が達成された、とする見解である⁽⁴⁾。

古典派経済学の批判的継承者の更にもう一つの学派に新古典派経済学（あるいは近代経済学）がある。19世紀後半に現れた限界効用学派は、古典学派の労働価値説を離れ、財の価値は最終的な経済主体＝消費者の主観的効用の大きさに拠るという効用価値説を主張した。彼らは主な関心を商品の生産量と価格の関係などの分析に集中し、そこでは資本主義の発展問題は論じられなかった。20世紀前半のケインズ学派の場合も、主な関心は経済の短期的変動と失業問題に向けられ、長期的な経済成長問題は論じられなかった。

しかし、1950年代中頃から第3世界の低開発問題をきっかけとして、新古典派にも長期的な経済変動を論じた経済成長理論（ロイ・ハロッド、ジョン・ロビンソン、サイモン・クズネッツら）が現れ、それを歴史分析に応用した W. A.ルイスや W. W.ロストウらの経済成長史学（New Economic History）が成立した。この理論は近代社会の経済的特徴を、一人当たりの生産高の増大を指標とする持続的経済成長と見なし、産業革命を持続的経済成長の歴史的契機と見なした。この理論は、従来の資本主義論が古典派、ドイツ歴史学派・新歴史学派、マルクス学派のいずれもイギリスおよび欧米諸社会の歴史過程を主な対象としたのに対して、世界の諸国民の文化的多様性を踏まえた、しかも資本主義国、社会主義国を問わずに進行する工業化の現実に対応させた20世紀的な新味を持った理論として登場した。

この学派の代表作の一つにロストウ『経済成長の諸段階—一つの非共産主義宣言—』（1960年刊）がある⁽⁵⁾。それは副題にみられるように、「近代史に関するカール・マルクスの理論に代わるべきものである」と意識され、そこではアメリカ型社会を最高モデルとして、「第3世界」の社会主義への傾斜を阻止するという目的が打ち出された。方法的には、それはドイツ新歴史学派の特徴を継承しており、1国史的であり、単線的発展段階論を特徴としている。すなわち、それは1国を単位と

(4) カール・マルクス（マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳）『資本論』大月書店版 第1巻第2分冊第7編第24章「いわゆる本源的蓄積」

(5) W. W.ロストウ（木村健康、久保まち子、村上泰亮訳）『経済成長の諸段階—一つの非共産主義宣言—』ダイヤモンド社 1960年

する社会の発展段階を伝統社会→近代社会という2段階に区分し、近代社会の経済的特徴を工業社会として捉えた。従ってそれは、伝統社会から工業社会への発展が工業化（産業化）industrializationであり、国民経済における純投資率（＝純投資／国民所得×100%）が5%以下（＝伝統社会）から10%ないしそれ以上に急上昇したとき（＝離陸期 take-off period）、持続的経済成長を特徴とする近代社会＝工業社会が出現した、と説明した。最初の離陸を経験した国民経済は18世紀末のイギリスであり、従って本来の近代社会（＝工業社会）はここから始まることになる。

要するに、近代および資本主義概念の古典的見解では、ヨーロッパ的概念としての近代の始まりは1500年前後のルネッサンス期とするのが通説である。しかし資本主義の起源については「16世紀半ばから18世紀の最後の3分の1期まで続く本来のマニファクチュア時代」（マルクス⁽⁶⁾）あるいは「初期資本主義時代」（ゾンバルト）のように1500年前後に起点が求められ、しかし資本主義的生産の機械に基づく「大工業」時代（マルクス）、「高度資本主義時代」（ゾンバルト）、「工業社会」（ロストウ）の到来は1800年前後に「大転換」期（ポランニー⁽⁷⁾）が求められている。

2. 近代化論と世界システム論

1970年代にアメリカの歴史学界・社会学界で台頭してきた世界システム論の背景には、1950年代以来アメリカの学界から世界に広まった近代化論 modernization theories への批判があった。また、1960-70年代に日本の歴史学界で展開された世界資本主義論は、日本の戦後歴史学における「近代主義」⁽⁸⁾への批判として登場してきた面があり、世界システム論と日本の世界資本主義論には共通する部分があった。それはアメリカの近代化論と日本の「近代主義」の議論の間には、方法的に重なる部分があったからである。以下本章では、この問題を正面から論じた柴田三千雄『近代世界と民衆運動』（岩波書店 1983年刊）に依拠していくつかの論点を確認しておきたい。

(6) カール・マルクス『資本論』大月書店版 第1巻第1分冊 441ページ

(7) カール・ポランニー『大転換—市場社会の形成と崩壊—』東洋経済新報社 1975年

(8) 柴田三千雄の指摘するような「日本の戦後歴史学の問題意識」を、本稿では便宜上「近代主義」と呼んでおく。

柴田に拠れば、日本の戦後歴史学の問題意識は、第2次世界大戦直後に登場し、1960年代まで、わが国の歴史学の一大潮流となった。その特色は世界史的観点を何よりも優位におく基本姿勢をとり、マルクス主義史学—特に戦前の「講座派」の流れをくむもの—が潮流の基調となり、その問題意識は近代ヨーロッパに焦点を当てた世界史の観念だった。戦後歴史学の最大の関心は、近代化の問題だった。発展段階的には近代日本の社会構造は資本主義に属するが、その資本主義の後発性から、日本資本主義の「前近代性」の問題が、戦前から「軍事的半封建的」性格などとして指摘されていた。このような日本の戦後歴史学は、南北問題の表面化とともに、世界資本主義論へと問題関心を移行させた⁽⁹⁾。

このように日本の「近代主義」は、近代日本社会の「前近代性」をあばき、その克服を課題として設定した。ここでの近代とは、共同体諸規制から解放された独立した個人の存在であり、自由な契約社会＝西欧的市民社会を理想とするものであった。これに対しアメリカの近代化論は、日本の近代化過程を一つのモデルとして位置づけ、日本社会の近代性を積極的に評価した。ここでの近代とは、工業化、都市化、官僚制化など文化の相違を越えた共通の社会的特徴の存在だった。両者には以上のような相違点があったが、方法的には共通点があった。両者は前近代と近代とを比較する類型論的比較史学であり、共に1国史的で単線的発展段階論の特徴を共有していた。

次に日本における世界資本主義論の論点を確認しておきたい。世界資本主義論とは、「先進資本主義社会と低開発社会とを一国別に切り離さず、資本主義の世界体制という全体のなかで相互関連する同時存在として捉えよ」⁽¹⁰⁾という議論である。これは今日の低開発社会の姿は先進国の過去のある段階に相当するという、単線的発展段階論への批判として登場してきたものである。

戦後日本の「近代主義」の代表的な歴史理論は大塚久雄を中心とする大塚史学であろう。その大塚久雄は1960年代末に至り、彼独自の世界資本主義論を展開した。「私は・・・世界資本主義というものを、たとえば一国資本主義が特定の経済構造としてそこにあるというような意味で、存在するものとは考えていない。そういう

(9) 柴田三千雄『近代世界と民衆運動』岩波書店 1983年

(10) 『同書』 4ページ

さまざまな独自の構造をもつ複数の一国資本主義が絡まり合い、・・・そういう総体の姿こそが世界資本主義だ。⁽¹¹⁾」

「歴史上、具体的にはイギリス資本主義、ドイツ資本主義、またアメリカ資本主義というように、各国におけるそれぞれの資本主義の発展があるのみで、何らかの世界資本主義がそれ自体の発達などといったものがあるわけではない。⁽¹²⁾」

柴田が指摘しているように、大塚の世界資本主義論では、世界に同時存在している諸社会の構造は、1国史的に見れば段階をなしており、国際的に見れば類型をなすという二重規定を受けているという、世界体制の設定が、いわば類型比較のための同時代的な場としての機能しか持っていない。構造を持ち、発達するのは1国資本主義だけであり、「世界資本主義とは、複数の一国資本主義の相互規定的な関係の総体」として捉えられている⁽¹³⁾。

世界資本主義を複数の1国資本主義の相互規定的な関係として捉えた大塚久雄の理論に対し、それと対極的な世界資本主義論を大塚より以前に経済学分野で展開していたのは岩田弘だった。「じっさい資本主義は、特定の諸国の特定の資本主義的産業部門を基軸として、それに商業的ないしは植民地的に従属せしめられた種々雑多な諸生産をその国内および国外に広汎に配置するような全体としての世界市場的過程として以外には実在せず、まさにそのような世界市場的過程として、ひとつの統一的な世界編成をなす世界資本主義をかたちづくっているのである⁽¹⁴⁾。」

「・・・現実の資本主義が、ひとつの有機的全体性をなす世界システムとしてのみ歴史的に過程するとすれば、その経済的分析は、資本主義をそうした世界システムとして全過程的に分析する世界資本主義分析としてしか存在しえず、したがって、産業、商業、金融、交通、農業等々のその個々の側面分析や、また各国資本主義の個別分析は、ただこうした世界資本主義分析の有機的一環として位置づけることによるのみ、ひとつの経済学的分析たりうる・・・。⁽¹⁵⁾」

(11) 大塚久雄「産業革命の諸類型」『大塚久雄著作集』第5巻 岩波書店1969年 461ページ

(12) 大塚久雄「産業革命と資本主義」『同書』421-2ページ

(13) 柴田三千雄『前掲書』5-6ページ

(14) 岩田弘『世界資本主義—その歴史的展開とマルクス経済学—』未来社 1964年 2ページ

このように岩田は世界資本主義を、各国資本主義の単なる集合体ではなく、統一的な世界編成をなす、「有機的な全体性をなす世界システム」として捉えた。世界システムとしての世界資本主義論は、さらに河野健二・飯沼二郎『世界資本主義の歴史構造』（岩波書店 1970年）において、歴史理論としてより具体的に展開された。その主な論点は以下のように要約されよう。

第1に、世界資本主義とは「種々の国民経済のあり方や特質そのものを条件付け規定する主体的で優位な構造であり、それ自体が歴史的な構造をもつとともに、諸国民経済およびその究極の土台をなす経済諸単位に特定の構造を賦与し、その行動様式を規定する」ものであり、「世界資本主義は異質的な構造を内包する複合的な全体構造である。」

第2に、「世界資本主義の実在性を確認する立場に立って、いわゆる『国民経済』をその二次的、派生的で、浮動的な構築物として捉えることが必要である。⁽¹⁵⁾」

第3に、河野健二は、世界資本主義は19世紀に形成されることになる世界の経済構造を包括的に捉えるための概念であり、その概念によってのみ19世紀から現代に至る経済史の総過程を法則的に捉え、再構成することが可能になる、と主張する。しかし、その萌芽はより古い時代にも見いだすことができる、という。すなわち、新大陸発見の時代は、「世界貨幣」段階であり、世界資本主義のもっとも端緒的な段階であり、世界資本主義の萌芽形態である、という。17・8世紀には世界市場が成立し、それはイギリスを中心とする資本主義の展開の刺激剤として作用した、という。そして1820・30年代にはイギリスを中心とする世界資本主義が成立する。イギリスは国民経済の枠組みを突破したため世界資本主義の中核となりえたが、イギリス以外の国はそれに背を向けつつ国民経済化を推し進め、その結果成功した複数の資本主義強国が出現すると、新たな世界資本主義の構図が生み出されることになる、という。

第4に、このようにして成立した世界資本主義は3重構造を持つ、という。すなわち、中核としてのイギリス資本主義と、国民経済の形成を通して世界資本主義の形成に参加するに至った、従属的であると同時に競争的な西ヨーロッパや北アメリ

(15) 『同書』 2ページ

(16) 河野健二、飯沼二郎『世界資本主義の歴史構造』岩波書店 1970年 3-4ページ

カ諸国などと、植民地・従属国からなる3重構造をなしていた、という⁽¹⁷⁾。

このように世界資本主義は統一的な実体であり、国民経済は二次的なものとした河野・飯沼の理論的な主張は、岩田の世界資本主義論とともにわが国独自の世界システム論を展開したものであり、A. G.フランクやI.ウォーラーステインらの歴史理論と共通点を持つものだった。

日本におけるこれらとほぼ同じ頃、アメリカ流の近代化論の批判としての従属理論と世界システム論が登場した。従属理論とは、近代化論の弱点をつき、低開発諸国の現状を開発諸国がすでに通過した初期段階と同一視するのは誤りだと批判した理論である。フランクはその代表的論者の一人だった。彼は一言で「低開発の開発」development of underdevelopment と述べたが、低開発の現状は未開発とは根本的に異なり、世界経済の「中枢＝衛星構造」metropolis-satellite structure の結果として生じたものである、というのがフランクの従属理論の基本テーゼである。彼に拠れば、低開発経済は資本主義的世界経済の一部であり、中心部の発展と周辺部の低開発の発展過程とは、同時進行の単一プロセスに他ならない、という⁽¹⁸⁾。

従属理論は、先進的な中心部と低開発的な周辺部とが同時に存在する全体的な資本主義世界を設定し、そこで世界的規模で行われる資本蓄積の構造（本来的蓄積と原始的蓄積）の同時的並行的存在に焦点を当てた。従属理論は、ラテンアメリカを舞台に経済学分野から提出された近代化論批判であったが、これを歴史学・社会学分野で受け止め、近代世界全体を対象とする歴史理論へと拡大して登場した理論が、I.ウォーラーステインらの世界システム論だった。

(17) 『同書』60-61ページ

(18) A. G.フランク（大崎正治・他訳）『世界資本主義と低開発』柘植書房 1976年；同（西川潤訳）『世界資本主義とラテンアメリカ』岩波書店 1978年；同（吾郷健二訳）『従属的蓄積と低開発』岩波書店 1980年（Andre Gunder Frank, *Capitalism and Underdevelopment in Latin America*, New York, 1967, 1969. do., *Lumpenbourgeoisie and Lumpen-development*, New York, 1972. do., *Dependent Accumulation and Underdevelopment*, New York, 1978.）

3. I.ウォーラーステインとS.アミンの近代世界システム概念

歴史の時代区分としての近代および資本主義の概念をめぐる問題は本稿のテーマである近代世界システムとグローバリズムの起源問題に直接関わりを持っている。ここでは近年の世界システム論からする近代および資本主義の起源をめぐるイマニュエル・ウォーラーステインとサミール・アミンの所論について検討する。次の引用は、今や世界システム論の古典となったとさえ思われるウォーラーステインの著書『近代世界システム』（第1巻1974年、第2巻1980年、第3巻1989年）の第1巻第2章の冒頭の文章である。

資本制生産様式に基礎を置く「ヨーロッパ世界経済」が出現したのは、16世紀のことである。奇妙なことに初期のこの段階では、資本家たちはあまり旗幟を鮮明にはしていなかった。営業の自由は支配的なイデオロギーとはなっていなかったし、個人主義や科学的思考法や自然主義、ナショナリズムなどでさえそうだった。こうした思想が世界観として定着するには、18・9世紀をまたなければならなかったのである⁽¹⁹⁾。

ウォーラーステインの世界システム論によると、近代という時代は「長期の16世紀」における「ヨーロッパ世界経済」の出現とともに始まる。「長期の16世紀」とはフェルナン・ブローデルのいう「1450年頃に始まり、1550年頃に終わる『16世紀の第一期』と、そこから1620年ないし1640年まで続く『16世紀の第二期』」を合わせた期間であり、「ほかならぬこの期間に、ブローデルのいう『巨大だが脆弱な』資本主義的『世界経済』が誕生した⁽²⁰⁾という。ウォーラーステインにとっても、近代の始まりは資本主義の始まりを意味する。

ウォーラーステインのいう資本主義とは何か。その本質的特徴は「市場における目的が極大利潤を実現することであるその市場での販売のための生産である」。そしてそのような市場交易の全面的発展と経済的支配を見るのは「長期の16世紀」ヨー

(19) I.ウォーラーステイン（川北稔訳）『近代世界システム I—農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立—』岩波書店 1981年 99ページ（Immanuel Wallerstein, *The Modern World-System: Capitalist Agriculture and the Origins of the World-Economy in the Sixteenth Century*, New York, 1974.）

(20) 『同書』102ページ

ロップにおける近代世界経済の出現とともにであった。「これが資本主義と呼ばれるシステム」であり、「資本主義と世界経済（つまり単一の分業と多数の政治および文化）は同じコインの両面である」。資本主義世界経済は、その出現から18世紀に至るまでは、世界市場が存在した範囲内で（つまりロシアを除くヨーロッパと西半球の大部分を含む広大な地理的範囲にわたって）存在した。だがこの世界市場での利潤のための生産は、大部分が工業生産ではなく農業生産であったので「農業資本主義」と呼ぶ。また資本主義は「商品としての労働」を意味し、「農業資本主義」時代には賃労働という様式のほかに、奴隷、「強制的換金作物生産」（再版農奴制に対するウォーラステインの呼称）、分益小作および定期借地という代替様式があった⁽²¹⁾。

16世紀の「ヨーロッパ世界経済」はどこにあったのかという点では、「従来別々に存在していた二つのシステムが結合して成立したと考えるのが、もっとも有効であろう⁽²²⁾と彼はいう。つまり「二つのシステム」とは北イタリア諸都市に中心を置く地中海交易圏と、北海・バルト海のフランドル・ハンザ貿易圏であり、両者の結合のうえにエルベ以东のポーランド・その他の東ヨーロッパの一部と大西洋沿岸の諸島と「新世界」の一部が付け加えられた世界だという。したがって、これにはロシア帝国やオスマン・トルコ帝国、さらにインドや東アジアは含まれていない。

ウォーラステインはいわゆる単線的発展段階論は拒否するが、現在唯一の「社会システム」である「資本主義世界経済」にも「全体としてのシステムの構造上の進化」の過程がある、としている⁽²³⁾。すなわち、「長期の16世紀」から1960年代に至るまでの期間を4段階に区分し、大区分としては「農業資本主義」段階と「産業資本主義」段階の2段階に区分している。4段階区分は概略以下の通りである。第1段階は「長期の16世紀」だが、1640年までに北西ヨーロッパは中核諸国家となり、スペイン、北イタリア都市国家は準周辺へと衰退し、北東ヨーロッパ、イベリア・アメリカは周辺となった。第2段階は1650-1730年、システム全体にわたる景気後退とオランダのヘゲモニーが成立した。第3段階は「産業資本主義」時代であり、

(21) I. Wallerstein, *The Capitalist World-Economy*, Cambridge University Press, 1979, pp. 6, 16-19.

(22) I.ウォーラステイン『前掲書』102ページ

(23) 『同書』15-16ページ

この時イギリスのヘゲモニーが成立した。いまや地球全体を含む「ヨーロッパ世界経済」の地理的拡大がなされ、他の世界システム、ミニ・システムは除去され、ロシアは準周辺状態に、ラテン・アメリカは引き続き周辺地域に、アジアとアフリカは19世紀には周辺地域に包含された。第4段階は第1次世界大戦後。ロシア革命により成立したソ連は、世界経済からの「重商主義的半退却」により、第2次世界大戦後には中核を追求するに至る。アメリカは1945-65年間ヘゲモニー国家となったが、1970年代以後世界的分業の再編成が不可避となった。

このように見てくると、ウォーラステインの近代世界システム概念では、本稿の1で述べたヨーロッパ史における伝統的な近代概念が生きており、それをより明確に定義づけていることがわかる。つまり、ルネッサンス・宗教改革という文化的基準よりもむしろ、「資本主義世界経済」 capitalist world-economy という政治経済的基準により、「長期の16世紀」(1450-1640年)に「ヨーロッパ世界経済」の範囲内で近代という時代が始まった、ということになる。ロシアを含む非ヨーロッパ世界には近代世界システム以外の三つのバラエティ、つまり世界帝国、世界経済、ミニ・システム world-empires, world-economies, minisystems からなる歴史的諸システムが共存し、それらはいずれも「資本主義的」ではなかったという⁽²⁴⁾。

したがって、近代世界システム(=資本主義的世界経済)に包含された地域では、中核であれ周辺であれ、近代という時代は「長期の16世紀」に始まる。しかし未だそれに包含されていなかった地域は別のシステム下にあり近代には属していなかった、ということになる。なぜなら18・9世紀の「産業資本主義」時代になって、近代世界システム=「資本主義世界経済」は初めて唯一の世界システムとなり、「それは地球を包囲した」'it encompassed the globe'⁽²⁵⁾からである。地球的規模での近代世界すなわちグローバリズムはこの時期に始まる、とも解釈できる。また例えば、日本は19世紀中頃まで非ヨーロッパ世界にあったが、おそらく安政の開港から明治維新の時期(1858-68年)に近代世界システムの周辺地域の一つに「編入」incorporationされたことによって、近代という時代を迎えた、と解釈できる。こ

(24) Immanuel Wallerstein, 'World System versus World-Systems -A critique', Andre Gunder Frank and Barry K. Gills, eds., *The World System: Five hundred years or five thousand ?*, London and New York, 1993, p. 293.

(25) *Ibid.*, p.295.

これは先に言及した『広辞苑』が日本の近代を明治維新から始まるとする古典的説明と完全に一致する。

ウォーラステインは1国史的視点や比較史の視点から先進国と後進国を識別するような単線的発展段階論を厳しく批判して、近代世界システム概念を展開したのだが、それと諸システムが共存していた時代のシステム間の相互関係については論じていない。この点から見ると、彼の近代世界システム概念は、ヨーロッパ中心の近代史観（＝ヨーロッパ中心主義 Eurocentrism）を超えてはおらず、むしろそれを近代世界システム論として斬新に仕上げた歴史理論とも見ることができる。ウォーラステインのヨーロッパ中心主義については、彼とフランクの論争があり、本稿4でさらに言及したい。

次にウォーラステインと同様に、資本主義と近代世界システムの起点を1500年頃に設定するサミール・アミンの近代世界システム概念を吟味する。まずアミンは、「(ヨーロッパ) 資本主義は世界 the world を統一した最初の社会システムである」⁽²⁶⁾という命題は、ひどく現実を歪めたヨーロッパ中心主義的イデオロギーである、とウォーラステインを含む資本主義＝ヨーロッパ起源説を批判する。なぜなら「16世紀以前の諸社会は決してお互いに孤立していたわけではなく、少なくとも地域的諸システム（そしておそらく一つの世界システム a world system）内の競争的なパートナーたちであった」⁽²⁷⁾からであり、それらの相互作用を見落とすと、それらの進化のダイナミクスを理解できなくなる、と彼はいう。アミンは資本主義の起源を論じるに当たって、明らかに近代およびそれ以前の諸システム間の相互作用を問題にしているのである。

アミンのいう資本主義概念だが、それはマルクスの資本主義的生産様式である。それは生産手段の私的所有制を必要とし、生産諸力のより高い発展水準と2大階級への社会の分裂を想定している。「かくして普遍化された資本主義的市場はその内部で経済的諸法則（『競争』）が主観的意志から独立した諸力として作用する枠組みを構成する。⁽²⁸⁾」しかし、近代以前の社会はこのような諸原理に基づいていなかった。

(26) Samir Amin, *The Ancient World-Systems versus The Modern Capitalist World-System*, *Ibid.*, p.247.

(27) *Ibid.*.

(28) *Ibid.*, pp.247-8.

紀元前300年から西暦1500年までのすべての先進的諸社会は、全期間を通じて類似しており、それをアミンは貢納制社会 tributary societies と名付けた。「すなわち、剰余は位階制権力の組織と結びついたいくつかの透明なからくり devices を通じて農民の活動から直接的に引き出される（権力は富の源泉であり、一方資本主義ではその逆が通例である）。⁽²⁹⁾」

アミンは、マルクス主義者における単線的な社会発展の5段階説および進化能力を欠いた「アジア的」道（アジア的生産様式）と唯一資本主義に到達しえた（奴隷制から封建制へと進む）「ヨーロッパ的」道という「二つの道」論はともにヨーロッパ中心主義の産物であるとしてこれらを拒否している。これらに代わり、彼は共同体的家族 communal family と貢納制的家族 tributary family という継起的な二つの「生産様式としての家族」families of modes of production 概念を設定する。より以前の時代について、共同体的段階 communal phase では国家とイデオロギーの支配はなかったが、貢納制的段階では国家主義的・イデオロギー的・形而上学的形態の社会的権力が結晶化した、という。そして後の時代について、貢納制的段階から普遍化された市場と経済学的イデオロギー（=価値法則）が支配する資本主義的段階へと進化した、と彼はいう。彼はまた、資本主義的段階と同様に貢納制的段階にも「中心／周辺」の形態と分極化が存在したという。「しかし分極化が地球全体の統合の内在的副産物となったのは近代という時代においてのみだった」、という⁽³⁰⁾。

このようにアミンは、経済学（=価値法則）に支配された現在の資本主義的世界システムはそれ以前の政治・イデオロギーに支配された貢納制的システムおよび共同体的システムと根本的に異なることを強調する。そして「資本主義の本質的諸要素がルネッサンス期のヨーロッパにおいて結晶化したという認識は—アメリカ征服の開始である—1492年を、分離できない二つの現象である、資本主義および世界資本主義的システム両方の同時的な誕生年であることを示唆している」という⁽³¹⁾。

アミンは、近代（資本主義）世界システムの進化の過程を次の4段階として捉え

(29) *Ibid.*, p.248.

(30) Samir Amin, *Capitalism in the Age of Globalization*, London and New York, 1998, p.1.

(31) Samir Amin, *op. cit.* p.251.

ている。(1)重商主義的な時代 (1500-1800年)。(2)古典的な時代 (1800-1945年)。(3)第2次世界大戦戦後期。(4)最近の時期 (1990年以後)。

(1)ヨーロッパとアメリカ間に成立した「世界資本主義システム」は、1500年から1800年の時期は、アンシャン・レジーム、絶対王政、重商主義の時代などと呼ばれたが、この期の経済は産業資本主義というよりも交易と交換中心の商業的な移行的形態のものであった、とアミンはいう⁽³²⁾。ここで彼は、「プロト資本主義の諸要素」protocapitalism elements という用語を援用して、移行の論理を説明している。その諸要素とは私的所有制、商品生産、賃労働の三つだが、それらは1492年に突然出現したわけではなく、それ以前から存在したし、ヨーロッパだけでなく、アラブ=イスラム、インド、中国等々の諸社会にも存在した⁽³³⁾。しかし1492年後のヨーロッパを除いて、プロト資本主義的諸要素は支配的な貢納制的論理に従属していた。ところがヨーロッパでは、1492年後のアメリカ植民地化の結果としてプロト資本主義の諸要素の拡大が加速され、「3世紀の間植民地化に関与した諸社会システムはその諸要素によって支配された」⁽³⁴⁾。

アミンに拠れば、例えば貢納制的システムの中心にあった中国やアラブ・イスラムでは中央集権的国家がプロト資本主義より優勢であったが、「地中海システム」⁽³⁵⁾の周辺に位置したヨーロッパの封建社会は、なお大部分が後進的な共同体的段階にあった本体に地中海貢納制的構成 the Mediterranean tributary formation を接ぎ木した産物であり、封建的分権制下におかれていた、そのことがプロト資本主義の諸要素の拡大に機会を与えた、という。中央集権的貢納制国家は貢納制的支配階級と融合したが、ヨーロッパの絶対王政という遅すぎた中央集権国家は、貢納制的階

(32) 「産業革命以前の重商主義的形態 (1500-1800年) は、有力な大西洋の諸中心における商人資本のヘゲモニーによって、そしてまたその機能が商人資本の蓄積論理に全面的に迎合することを意味していた周辺的地帯 (アメリカ大陸) の創造によって形づくられた」と述べている。Samir Amin, *Capitalism in the Age of Globalization*, p.1.

(33) Samir Amin, *op. cit.*, p.251.

(34) *Ibid.*, p.252.

(35) アミンが名付けた呼称で、紀元前300年のアレキサンダー大王の遠征時から1500年のルネッサンス期まで、全体としての地中海とアラブ・イスラムおよびヨーロッパまで拡大した地域に存在したという貢納制的システム。*Ibid.*, pp.253-4.

級の崩壊のうえに築かれ、したがって「絶対主義は新しい興隆しつつあるプロト資本主義的諸力と封建的搾取の名残間の均衡から生じた」という⁽³⁶⁾。

ルネッサンスから18世紀の啓蒙主義に至るイデオロギー革命は自然科学と社会科学を形而上学から解放した。「ヨーロッパ諸社会は『ブルジョア革命』（イングランドにおける1688年，ニューイングランドにおける1776年，フランスにおける1789年）に向かって急速に動き始めた」。それらはプロト資本主義的前進にプラットフォームを与えた絶対王政に挑戦した。そして制限的ではあるが民主主義により正当化された権力の新しい概念が導入された。こうして，ルネッサンス以降ヨーロッパ人たちはすべての他の諸社会に対する少なくとも潜在的優越性を獲得し，それ故全地球を征服することができると知り，それを彼らは実行し始めた⁽³⁷⁾。

(2)1800年後の産業革命から第2次世界大戦の終了までの世界システム the world system は近代的（資本主義的）分極化の古典的形態を示している，とアミンはいう。工業化された中心地域 the center とは対照的に，ラテンアメリカのほか日本を除くアジア全体とアフリカを加えた周辺地域 the peripheries は，農村的で工業化されないままであり，結果として世界的分業への参加が農業と鉱物生産を通じてなされた。このような資本主義的分極化の特徴に，「ブルジョア的国民国家の建設に平行した国民的な自己中心的組織である中核的工業組織の結晶化」という第2の特徴が随伴した。この期のこれら二つの特徴から，分極化に対抗する国民的解放のイデオロギーとして，「キャッチ・アップ」の手段としての工業化および国民国家という二つの目標が生じた，という。

(3)第2次世界大戦後の時期（1945－1990年）には，それまで中心地域に限定されていた工業化および国民国家という二つの特徴の「継続的浸食」が進行した。国民的解放運動により，周辺部に政治的自治を回復した国民国家が形成された。そして，不平等かつ不均等にではあるが，周辺部に工業化が進行した。この二重の「浸食」はグローバリゼーションの深化の新たな兆候だった，とアミンはいう。

(4)(1990年以後の) 最近の時期には，「戦後世界システムの特徴的な均衡」が崩壊

(36) *Ibid.*, p.252.

(37) *Ibid.*, p.253.

した、という⁽³⁸⁾。

以上は、1997年のアジア危機の直後に発表されたアミンの近代世界システム概念の概要である。これを先に取り上げたウォーラーステインの概念と比較した場合、まず両者の主な共通点として以下の3点を指摘することができる。共通点の第1は、近代および資本主義の起点についてである。ウォーラーステインは「長期の16世紀」(1450-1640年)に近代世界システム＝「資本主義世界経済」がヨーロッパとアメリカの範囲内で成立したといい、アミンは、近代(資本主義)世界システムは1492年後のヨーロッパによるアメリカ征服の開始とともにヨーロッパとアメリカの間に成立したという。共通点の第2は、両者の近代世界システムが成立後の第1段階ではグローバルな唯一の世界システムではなかったとされている点である。ウォーラーステインの場合には、16世紀から1800年までの期間には複数の「世界帝国」、「世界経済」、「ミニ・システム」が共存していた。アミンの場合には、1500-1800年の「世界資本主義システム」は重商主義的時代の移行的形態のものであり、この時代には貢納制的システムと共同体的システムが共存していた。共通点の第3は、両者とも1800年後近代(資本主義)世界システムは産業資本主義段階へと移行し、全世界を覆うグローバルな世界システムへと拡大した、としている点である。

これらの共通点に対し、筆者が注目したい両者の差異点は次の2点である。差異点の第1は、両者の資本主義概念の違いにある。ウォーラーステインの資本主義とは先に述べたように「世界市場での利潤のための生産」であり、「商品としての労働」であり、「長期の16世紀」に「資本主義世界経済」が唯一ヨーロッパとアメリカの間に成立した。彼に拠れば「世界経済」(単一の分業と複数の政治と文化)はそれ以前にも存在したが、それらは不安定でほどなく解体するかあるいは「世界帝国」(単一の政治システム)に転化してしまい、唯一500年も生きながらえた「世界経済」はヨーロッパに始まる「資本主義世界経済」だった、という。そこでは中核の自由な賃労働も、準周辺に分益小作農の労働も、周辺の奴隷労働や農奴労働とともに資本主義の構成部分であった。したがって16世紀後の資本主義世界経済の発展とは「歴史的に外延的に(＝編入)および内包的に(＝漸進的労働のプロレタリア

(38) Samir Amin, *Capitalism in the Age of Globalization*, p. 2.

化と土地の商業化) 拡大された」諸局面があるのみである⁽³⁹⁾。

アミンの資本主義とは基本的には価値法則の支配を指すのだが、資本主義の本質的要素として私的所有制、商品生産、賃労働 (=プロト資本主義の諸要素) を挙げる。しかもこの「プロト資本主義」は、1492年よりはるか以前から世界の地域的システム内に従属的な要素として存在し続けていたと彼は主張し、資本主義を唯一ヨーロッパ起源とするウォーラステインらの主張をヨーロッパ中心主義の誤りとして批判する。

アミンに拠れば、世界システム内における中心—周辺関係は近代世界システムに限られるものではなく、貢納制システムにも存在したという。アミンがアレキサンダー大王の遠征から1500年のルネッサンス期まで存在したという、近代以前の「地中海システム」ではヨーロッパはその周辺にあり、中心におけるアラブ・イスラムのような中央集権的貢納制国家を構築できず、そこでは封建的分権制が定着し、そのことがヨーロッパにおけるプロト資本主義の拡大に機会を与えたという。つまり、ヨーロッパとアメリカ間に成立した「世界資本主義システム」の資本主義とはヨーロッパ固有のものではなく、地域的諸システムの相互作用の結果としてたまたまヨーロッパで拡大したものだ、と彼はいうのである。

差異点の第2は、1500-1800年の期間について、ウォーラステインはその性格を「農業資本主義」段階とし、アミンは「重商主義時代」としている点である。ウォーラステインの場合、この時期の資本主義は、世界市場での利潤のための生産は大部分が工業生産ではなく農業生産であったので、「農業資本主義」段階と呼んだ。中核地域におけるジェントリー地主、準周辺における分益小作制下の地主、周辺におけるアメリカの奴隷制プランテーション地主と東ヨーロッパの再版農奴制下のユンカー地主はいずれも、商業資本家や産業資本家とともに近代的なブルジョアジーないしブルジョア的地主である。また中核における自由な賃金労働者、準周辺における分益小作農民、周辺における奴隷や農奴はいずれもプロレタリアないし半プロレタリアである⁽⁴⁰⁾。したがって、18世紀における市民革命や産業革命は近代世界シ

(39) I. Wallerstein, *The Capitalist World-Economy*, p.145.

(40) I.ウォーラステイン (川北稔訳) 『近代世界システム1730-1840s - 大西洋革命の時代-』名古屋大学出版会 1997年 第2章

システムの断絶を意味するものではない。

アミンの場合、1500-1800年には「世界資本主義システム」は産業革命以前の重商主義的形態のものであり、それは中心部における商人資本のヘゲモニー下であり、商人資本の蓄積論理に全面的に迎合したものであり、アンシャン・レジーム、絶対王政の時代と呼ばれた過渡的形態のものであった。したがって、中心部における18世紀の「ブルジョア革命」（1688年のイングランド、1776年のアメリカ独立戦争、1789年のフランス革命）は、「プロト資本主義的前進にプラットフォームを与えた絶対王政」の倒壊とともに、過渡的形態を終わらせた重要な歴史的画期として位置づけられている⁽⁴¹⁾。

4. A. G. フランクの世界システム論

本章では、ウォーラステインとアミンの世界システム論をともにヨーロッパ中心主義的であると批判した A. G. フランクと B. K. ギルズによる共同論文の論点およびフランクがそれを踏まえて発表した『リオリエント』における近代世界システム概念について検討する。

前章で見てきたごとく、ウォーラステインとアミンの近代世界システムの起点は1500-1800年頃に求められ、それは同時に資本主義という点では「資本主義世界経済」（ウォーラステイン）ないし「世界資本主義システム」（アミン）の起点でもあった。そして1500-1800年頃の期間では、近代世界システムは「世界経済」、
「世界帝国」、
「ミニ・システム」（ウォーラステイン）ないし「貢納制的システム」、
「共同体的システム」（アミン）などそれ以前から存在していた諸システムと共存していた。両者にとって、近代世界システムが地球上で唯一の世界システムとなったのは1800年後であり、したがって文字通りのグローバリゼーションはそのときに始まった、と解釈できる。この両者に代表されるような近代世界システム概念に対して、フランクとギルズは、両者の理論がともにヨーロッパ中心主義的であると批判し、その克服を目指した彼ら独自の世界システム論を展開するに至った。

フランクとギルズは、「現在の世界システムは少なくとも5000年の歴史を有して」

(41) Samir Amin, *op.cit.*, p.253.

おり、「この世界システムにおけるヨーロッパと西洋の優勢への勃興は近年の一そしておそらく一過性の一出来事にすぎない」とし、「われわれの論題はヨーロッパ中心主義 Eurocentrism に対する、より人間中心的な humanocentric 挑戦」であると述べ、次に示すような世界システム論の五つの理論的カテゴリーについて論じている⁽⁴²⁾。

(1) 世界システム the world system 自体について。

ウォーラステインのハイフン付き「近代世界システム」the modern world-system は500年前に全世界にではなくその一部分に成立したというものだが、フランクとギルズは「われわれがその内部で生活している同じ世界システムの存在は少なくとも5000年前に遡る」ものであり、それは「ほぼ世界（全体をおおう）システムである」という。

(2) 世界システムの原動力としての資本蓄積過程について。

ウォーラステインやアミンらは継続的な資本蓄積を「近代世界システム」の特性 differentiae specificaе と見なしているが、フランクとギルズは「近代」世界システムに限らず「この同じ資本蓄積過程が何千年もの間世界システム the world system における、唯一ではないにしても、中心的な役割を演じていた」という。

(3) 世界（システム）の内部と全体の中心一周辺構造について。

「近代」世界システムにおけるそしてとりわけ1492年以後のラテンアメリカにおける従属について、フランクはかつて誰にもましてこのことを書いた。フランクとギルズは「この分析上のカテゴリーは1492年以前の世界システムにも適用できる」という。

(4) ヘゲモニーとライバル間の交替について。

1492年以後の世界システムにおけるヘゲモニーをめぐるリーダーシップとライバル間の交替について、ウォーラステインらが優れた研究を行ったが、「しかし、ヘゲモニーとライバル関係はさらにそれよりもはるか以前の世界（システム）の歴史を残している」という。

(42) Andre Gunder Frank and Barry K. Gills, The 5,000-Year World System: An interdisciplinary introduction, A. G. Frank and B. K. Gills eds., *The World System*, pp.3-4.

(5)(しばしば"A"と呼ばれる) 上昇局面と(しばしば"B"と呼ばれる) 下降局面が交替する長期的(および短期的) 経済循環について。

「近代」世界システムの一つの重要な特徴は、資本蓄積過程がその内部の中心—周辺的位置によって変化し、そして世界システムのヘゲモニーとライバル関係がすべて循環的であり、またお互いに縦につながって生起する点にある。「しかしわれわれはいまや、この(同じ)世界システム循環および諸特徴がさらに1492年以前の幾世紀にも遡ることを発見している」とフランクとギルズはいう⁽⁴³⁾。

要するに、フランクとギルズの世界システムとは、過去5000年間にわたり唯一世界に存在したシステムであり、「近代」世界システムとはその近代における呼称である。過去500年の歴史を持つというウォーラーステインの「近代世界システム」もアミンの「世界資本主義システム」もこの世界システムの一部である。そして「近代」世界システムの特徴として挙げられた原動力としての資本蓄積過程、中心—周辺構造、ヘゲモニーとライバルの交替および長・短期の経済循環は「近代」のはるか以前から世界システムに存在していたものであり、それらは「近代」固有の特性 *differentiae spificae* ではない、というのである。フランクとギルズはこのように世界システムの連続説を強調することによって、近代を断絶として捉えるあらゆる通説に対する批判を試みているのである。近代の断絶説は結局ヨーロッパ中心主義に陥らざるをえないと彼らは考えているからである。アミンは、ウォーラーステインの「近代世界システム」=「資本主義世界経済」がヨーロッパ起源のものであり、それがやがて非ヨーロッパ世界を編入するという主張を、ヨーロッパ中心主義と批判した。同時にフランクとギルズは、アミンの「世界資本主義システム」も1500年以後ヨーロッパを中心とする近代=資本主義の時代を迎えたとする断絶説を強調する点で、同じくヨーロッパ中心主義を免れていない、と見ている。

フランクとギルズは、第2次世界大戦後の経済史学界におけるいくつかの論争についても言及している。経済史のきわめて多くの書物が「西洋の勃興」の理由について書かれたが、「それらのほとんどすべてはその解答をヨーロッパ内部におけるあれこれの要因ないしそれらの結合にもとめ」、彼らにとっては、ヨーロッパの勃興は唯一の奇跡であって、世界システム *the world system* 内部の歴史と諸変化の

(43) *Ibid.*, p. 4

産物ではなかった、と指摘している。フランクとギルズは、新古典派経済理論と同じ立場に立つダグラス・C・ノースとロバート・P・トーマス『西洋世界の勃興—新経済史—』（1973年）⁽⁴⁴⁾をその一例として挙げている。すなわち、その最初のページには「西ヨーロッパにおける効率的な経済組織の発展が西洋の勃興の理由である」と述べられ、次いで制度的変化、とりわけ財産権の発達的重要性が強調され、それらは他の世界には存在しなかったとしている点を、指摘している。

これに対して、マルクス主義経済史学は生産様式とか階級闘争のような概念に支配され、しかもこれらの概念は1国史的枠内で説明された、と指摘している。「西洋の勃興」と「資本主義の発展」という点で「マルクス主義経済史学はそれの『ブルジョア的』対抗者と同様に、あるいはそれ以上にヨーロッパ中心であった」と述べ、さらに1950年代以来国際的になされた「封建制から資本主義への移行」論争に言及している。

P.アンダーソンは西ローマ帝国の崩壊を奴隷制生産様式の死と封建制生産様式による漸次的代替として分析した⁽⁴⁵⁾。「ブレンナーはヨーロッパにおける封建制から資本主義への移行を、あたかも、外部的諸原因に関わりなく—ヨーロッパ的社会構成における封建的諸関係の危機を引き起こした内部的階級諸矛盾の結果として（唯一ではないとしても）主に生じたと分析している」と彼らは指摘している⁽⁴⁶⁾。同様の論点はドップ＝スウィージー論争のドップの見解にも共通する。いわゆる「生産主義者」productionistの立場に立つドップに対する、世界市場諸関係の貢献を強調した「流通主義者」circulationistの立場に立つスウィージーとの論争である⁽⁴⁷⁾。この論争は、さらに30年後になされたブレンナー＝ウォーラーステイン論争にも引き継がれた。主な論点は、西ヨーロッパにおける封建制から資本主義への移行と東ヨーロッパにおける「再版農奴制」second serfdomの再検討についてだった。ブレンナーはドップ派の「生産主義者」の立場に立ち、ウォーラーステインは資本主

(44) Douglass C. North and Robert Paul Thomas, *The Rise of the Western World: A new economic history*, Cambridge, 1973.

(45) P. Anderson, *Lineages of the Absolutist State*, London, 1974.

(46) T. Aston and C. Philpin, eds., *The Brenner Debate. Agrarian Class Structure and Economic Development in Pre-Industrial Europe*, Cambridge, 1985.

(47) M. Dobb, *Studies in the Development of Capitalism*, London, 1946.

義的近代世界システムに焦点を当てた⁽⁴⁸⁾。

フランクとギルズは、これらの論争の中心にはきわめて重要な方法論上の問題があると指摘する。「われわれは主要な分析単位として単一の社会（もしくはそのようなものがありうるのなら）や単一の国家や単一の生産様式（もしかつて分離したそれがあったのなら）を採用すべきだろうか。そうすることは社会変化の原因説明を述べるのに生産および内生的諸要因に特権を与えることにつながる。あるいはわれわれは全ての地理的地域が含まれている物質的および政治・軍事的相互作用によって示唆された最大の分析単位を採用すべきだろうか。そうすることは蓄積、交換およびヘゲモニーの諸影響ないし対抗に特権を与える（あるいは少なくとも強調することにつながる⁽⁴⁹⁾。」

新古典派もマルクス派もヨーロッパ中心主義の学者たちは移行問題の解答をヨーロッパ内部に、あるいはその生産様式や財産制度に求めたが、ヨーロッパの問題を理解しようとするならわれわれはその問題を生み出した世界システムから出発しなければならないし、ヨーロッパ的ないし1国史的枠組みという自ら課した幻想を抜けださなければならない、とフランクとギルズは強調する。必要なのは分離主義ではなく、フェルナン・ブローデルの「全体史」total historyのような全ての方向を含む全体論 holism の視点である、と彼らはいう⁽⁵⁰⁾。

以上述べてきたように、フランクとギルズは新古典派やマルクス派の単線的発展段階論や1国史観ないし内部要因決定論をヨーロッパ中心主義として世界システム論の立場から批判したのだが、同時にウォーラーステインとアミンの世界システム論もまたヨーロッパ中心主義を免れていないと批判し、彼らは世界システム論の連続説を主張した。そしてフランクはそのような世界システム論の立場から、1998年に『リオリエント—アジア時代のグローバル・エコノミー—』を発表した。次にこの著書に見られるフランクの世界システム論をさらに検討したい。

『リオリエント』の「まえがき」では、まず前述したフランクとギルズの世界システム・テーゼ、すなわち「ウォーラーステインの『近代』500年世界システムを

(48) Denmark, R. and K. Thomas, 'The Brenner-Wallerstein debate,' *International Studies Quarterly*, 33, 1988, (March).

(49) A. G. Frank and B. K. Gills, *op. cit.*, p.29.

(50) F. Braudel, *Civilization and Capitalism*, 3 vols, New York, 1981-4.

規定する諸特徴と同じ特徴が、少なくとも5000年遡って同じシステムの中に見出さる」ということが確認されている⁽⁵¹⁾。そして400ページを超える分厚い著書を出版した第1の意図を、第1章「現実の世界史とヨーロッパ中心主義的社会理論の対決に向けて」で、フランクは次のように述べている：

「ヨーロッパがアメリカ産の貨幣を使って、どのようにアジアの生産、市場、交易に割り込み、そこから利益を引き出したか・・・を示す。ヨーロッパは、アジアの背中によじ登り、次いでアジアの肩の上に立ちあがったのである—だが、それは一時的なものなのだ。本書はまたいかにして『西洋』がそこにたどりついたか—そして、そこから示唆されることとして、なぜ、またいかにヨーロッパが間もなくその地位を再び失いそうであるか—を、世界経済の観点から説明することをも試みる⁽⁵²⁾。」

フランクは、彼の「5000年世界システム論」を主張することによって、そこから派生する二つの論点、一つは1800年頃まではアジア特に中国とインドは世界経済にとってヨーロッパよりはるかに重要な存在であったことを示すこと、もう一つはヨーロッパ中心主義的社会理論の批判を本書の課題とすることである。以下第2章から第7章まで、1400-1800年の「初期近代の世界経済」the early modern world economy が論じられている。第2章「グローバルな交易の回転木馬、1400-1800年」では、世界経済における交易の構造と流れが検討され、第3章「貨幣が世界をめぐる、そして世界をまわす」では、世界経済およびその部分たる諸地域間の関係形成における貨幣の役割が検討されている。貨幣が人体の血液・血管にたとえられ、貨幣システムが世界経済本体のエネルギー供給源であることが論じられている。第4章「グローバル・エコノミー—比較および諸関係」では、グローバルな世界経済について人口、生産、交易、消費などいくつかの定量分析を行い、アジアの諸地域が世界経済の中で少なくとも1750年までは、全ての点でヨーロッパ全体と比べても、より重要であったことを論証しようとしている。マルクス、ヴェーバー、ゾンバルトやその他によっていわれてきた「アジア的生産様式」論に代表されるような停滞

(51) アンドレ・グンダー・フランク（山下範久訳）『リオリエント—アジア時代のグローバル・エコノミー—』藤原書店 2000年 31ページ (A. G. Frank, *ReORIENT: Global Economy in the Asian Age*, London, Los Angeles, 1998.)

(52) 『同書』52ページ

的なアジア観はヨーロッパ中心主義の神話にすぎない、と彼はいう。第5章「横に統合されたマクロ歴史」では、出来事や過程の同期性は偶然ではないとし、世界中で同時に起こっている出来事の共通で互いにつながりのある原因が探求されている。ここでフランクは200-300年の長さを持つ拡大期のA局面と収縮期のB局面とが500年単位で交替するという彼自身の世界経済循環説の妥当性を検証しようとしている。第6章「なぜ西洋は（一時的に）勝ったのか」では、「東洋の没落」と「西洋の勃興」の理由がグローバル経済の視点から論じられる。「1750年以降アジアの没落へと導いたのは、言われているようなアジアの弱さとヨーロッパの強さではなく、むしろ初期近代期の世界史におけるアジアの強さの影響である」⁽⁵³⁾という。1800年以降ヨーロッパがその地位を上昇させることができたのは、それまでヨーロッパが世界経済の中で周辺的な地位にあったからであり、ヨーロッパは1750年以降の「アジアの没落」を利用しえたからである、という。産業革命の結果ヨーロッパ人が世界経済において獲得した支配的地位は、イギリスやヨーロッパの内的な要因だけを基礎として説明するのは適切ではなく、グローバルな世界経済の観点から説明する必要がある、という。「全体は部分の総和を越えている以上、各部分は他の各部分から影響を受けるのみならず、世界（システム）全体に生じたことによっても影響を受ける。・・・（中略）・・・一言で言えば、私たちは世界システムのいかなる部分を説明するにもホーリズム的分析を必要とする」⁽⁵⁴⁾。結論部に当たる第7章「歴史記述上の結論と理論的含意」では、この全体論の視点からヨーロッパ中心主義的諸理論の批判と歴史と理論の再構築の可能性と必要性が述べられている。

『リオリेंट』の要点は概略以上のようなものだが、次に本稿の課題である近代と資本主義の概念について、フランクの捉え方を吟味しておきたい。フランク世界システム論の第1の特徴は、前述したように「5000年世界システム」という連続説つまり「タテ」の（=時系列的）ホーリズムである。したがって、「1400-1800年初期近代の世界経済」⁽⁵⁵⁾というような用語は使用するが、「中世と近代とに大きな歴史的不連続がある」というような意味での近代概念は否定する。なぜなら「歴史

(53) 『同書』101ページ (*Ibid.*, p.37.)

(54) 『同書』102-3ページ (*Ibid.*, p.37.)

(55) 『同書』97ページ (*Ibid.*, p.34.)

的連続性は、いかなる不連続性よりもはるかに重要である」と彼は主張するからである⁽⁵⁶⁾。同様に、資本主義、グローバリゼーション、「西洋の勃興」などにより世界史の過程が根底的・質的に変化したというような現在通説となっている不連続説は、ヨーロッパ中心主義的な情報に基づく間違いであり、ホーリズム的で世界的な視点に立てば、不連続性は、はるかに大きな連続性によって置き換えられることになる、と彼は言う。

フランク世界システム論の第2の特徴は、唯一の世界システムつまり「ヨコ」の(=空間的)ホーリズムである。本当の世界システムはウォーラステインのヨーロッパ中心の「近代世界システム」という「プロクルステスの寝台のごとき構造」を持つそれではない、とフランクは言う。彼のいう世界システムとは5000年にわたり連続して存在した地球上唯一の世界経済/世界システムであり、「それは、特に世界規模での貨幣市場を通じた、グローバルな分業、および商業・金融の結びつきを持っていた」⁽⁵⁷⁾という。またその構造は単一の中心ではなく、位階状になった諸中心を持っていた、という。しかし、フランクの世界システム論の展開はここまでであり、この世界システムに固有のグローバルな構造と動態を解明するには、もっと多くの研究を待たなければならない、との示唆に留められている。

フランク世界システム論の基本的な方法論は、財産制度、生産様式、階級、西洋市民社会というような要素還元的なあるいは本質論的な分析方法や比較史的な方法は取らず、全体論(ホーリズム)的な関係論的方法により「タテ」と「ヨコ」の歴史叙述を行うことである、と見ることができる。たとえば、世界経済/世界システムにおける生産は多様な生産様式の下で行われてきたのであり、それを資本主義的生産様式というような一つの要素に還元して近代世界を説明するのは誤りである、という。世界経済/世界システムの各部分構成である諸地域はグローバルな分業関係にあり、それを一つのシステムとして「ヨコ」につないでいるものは貨幣であり、商業・金融の結びつきである、ということになる。かつての「封建制から資本主義への移行」論争では、小生産者の発展を重視した「生産主義者」の立場に立つモーリス・ドップの見解に対し、世界市場の役割を重視した「流通主義者」の立場に立

(56) 『同書』563ページ (*Ibid.*, p.342.)

(57) 『同書』541ページ

つポール・スウィージーの見解が対立したが、フランクの世界システム論は明らかに後者の系譜に属する理論と見ることができる。

フランク世界システム論の第3の特徴は、500年周期という仮説に基づく循環論である。「タテ」の連続性は単線的である必然性はなく、「ヨコ」の統合が均一的である必然性もない。連続的過程には脈動があり、その脈動は不連続性とは異なる。そしてその脈動は循環的である。循環的な動きは、存在、生命、生物、が持つ普遍的な事実であり、世界史においてもそれらの循環は世界的規模で、何千年間にわたり存在してきた、とフランクはいう。彼はここからさらに、「世界経済／世界システムの内部におけるきわめて不均等な循環的過程は、その世界経済／世界システムの構造的変容のメカニズムとして機能しているのではないか」⁽⁵⁸⁾というもう一つの仮説を提示している。

この循環論に基づくフランクの「西洋の勃興」をめぐる近代史の説明は、具体的には概略次のようになる。1400-1800年の世界経済とヨーロッパについても、アフロ・ユーラシアを通じて、連続的に共有されてきた歴史がある。13世紀末から、特に14世紀において、全アフロ・ユーラシア的な下降期および危機の時代が続いた。その次の長期的な拡大は、15世紀の初めに、東アジアおよび東南アジアにおいて起こった。その拡大の波は15世紀中葉以降にはその他のアジアからアフリカとヨーロッパを含むようになった。アメリカ大陸の「発見」とその後の「コロンブスの交流」は、このような世界経済／世界システムの拡大から生じた直接の結果だった。このように「長期の16世紀」の拡大は、実際には、15世紀に始まっており、そしてそれは17世紀から18世紀に入っても主としてアジアに基盤をおいて継続した。それはまた、ヨーロッパ人によってアメリカ大陸からもたらされた、金銀の新しい供給によっても推進された。アジアにおける拡大は、中国、日本、東南アジア、中央アジア、インド、ペルシア、オスマン帝国の各地で、人口、生産、交易、そしておそらく収入と消費の急速な増加という形態を取った。政治的には中国の明・清朝、日本の徳川幕府、インドのムガル朝、ペルシアのサファヴィー朝、トルコのオスマン朝といった各体制の繁栄と拡大をもたらした。

ヨーロッパにおける人口と経済の成長は、アジア諸地域よりも遅く、ヨーロッパ

(58) 『同書』575ページ

の「国民国家等も、アジアの諸国家よりもずっと規模の小さいものであった。また貨幣供給や人口増大によって、ヨーロッパにおいては、より激しいインフレが生じた。アジアでは17世紀の間を含めて、貨幣供給に見合うだけの生産の増加があったが、ヨーロッパの多くでは、経済的・政治的成長は制約されており、地域によっては、「17世紀の危機」に見舞われて、逆に衰退した。アジアの大半は、そのような痛手を被らなかつた。したがって、人口成長はヨーロッパよりもアジアにおいて、より急速であり、この傾向は1750年以降に屈折点を迎えるまで続いた。マクロ経済的な不均衡を反映し、銀は、圧倒的に、東回りに世界を巡ったが、また日本から、および太平洋を越えてアメリカから西回りでも流れ、究極的には、最大の銀の「シンク（排水口）」は中国であった。中国の相対的に強力な生産性と競争力は、きわめて大量の銀を引きつける磁場のように作用した。ここでは貨幣の流入は、有効需要の増大をもたらし、生産と消費の増加を刺激して、それによって人口増加が支持された。貨幣供給の増加が生産の成長を可能にするほどの拡張可能性のなかつたヨーロッパでは、有効需要の増大がインフレにつながっていた。世界経済におけるこの期のヨーロッパの立場は、不利なものであったが、それはアメリカの貨幣に対する特権的なアクセス（＝ただ同然の入手）によって、部分的に埋め合わされた。それによってヨーロッパは、有力な中心がすべてアジアにあった世界市場に参入し、その後、その市場シェアを拡大することができた。

1800年頃ヨーロッパは依然として、その生産力の点で後発的であったが、そのことがガーシェンクロンの論じたような、キャッチ・アップのための有利性をもたらした。ヨーロッパは、その後発性に誘因を得、またアメリカの銀供給に賄われて、ミクロおよびマクロ経済上の有利性を追求することができた。このように1750年から1850年の間に、世界経済／世界システムにおけるアジアとヨーロッパの地位の交替へとつながっていった。そして本書の最後にフランクは、19世紀に生じたこのような交替は、21世紀にもまた生じる見込みがあると述べ、結んでいる⁽⁵⁹⁾。

要するに、フランクの世界システム論における近代とは、「1400－1800年初期近代」と述べているように、1400年以後現在までの時期を近代の時代として扱っているようだが、それは古典的なヨーロッパ的近代概念でもなければ、ウォーラーステ

(59) 『同書』 578－586ページ

インやアミンの資本主義世界システムと結びついた近代概念でもない。またフランクの資本主義概念は5000年間いわば通史的に存在した経済制度であり、それは貨幣や商業・金融と同義のものである。フランクの世界システム論にとり重要な概念は、多中心的な唯一の世界システム内の脈動＝循環つまり500年周期の循環運動である。近代における世界システム内部の拡大傾向（＝A局面）は15世紀に始まり、それが主としてアジアに基盤をおいて18世紀まで継続したが、アジアはその後停滞ないし縮小傾向（＝B局面）に陥り、この機に乗じてヨーロッパは拡大に転じ、19世紀にはヨーロッパの優位へと地位の交替が生じた、というのである。

むすび

以上本稿では過去30年間にアメリカ流近代化論の批判として登場してきた世界システム論が、近代および資本主義という概念をどのように捉え直してきているかについて検討してきた。

現在通説化している近代および資本主義概念は、ヨーロッパ起源のものであり、19世紀的社会科学において定着してきた概念である。19世紀までに形成された古典的見解では、非ヨーロッパ世界は能動的な発展の可能性を欠いた停滞の世界であり、近代資本主義世界の形成というヨーロッパの膨張が、その停滞を打ち破る「文明化作用」として正当化された。しかし、その結果形成された帝国主義的＝植民地主義的世界は永続すべくもなく、20世紀前半に生じた2度の世界戦争を通じて崩壊した。

第2次世界大戦後出現した東西冷戦と「パクス・アメリカーナ」の世界体制下、1950年代後半にアメリカ流近代化論が登場し、アメリカ社会をモデルとした、各国民経済を単位とする、バラ色の工業化の展望が示された。しかし、1960-70年代に表面化した、南北問題という世界経済の不均等発展の現実は、近代化論批判としての世界システム論を生み出した。

本稿では、1960年代に登場した日本における世界資本主義論、1970年代以来のアメリカにおけるウォーラステインの理論、「南」の立場を鮮明にしたフランクとアミンの理論を取りあげ、各世界システム論における近代および資本主義概念について検討してきた。

日本における世界資本主義論、ウォーラーステインおよびアミンの世界システム論では、1500年後のヨーロッパの優勢を認めつつ、21世紀におけるその転換の可能性が論じられている。これに対しフランク世界システム論の新説は、世界システムの連続説を主張するとともに、18世紀までのアジアの優勢について論じ、ヨーロッパ中心主義史観の克服という課題を提案した。現代世界経済は北米、EU、東アジア（東北および東南アジア）という3極の成長センターを形成しているといわれるが、とりわけ東アジアの歴史分析のためには、従来の歴史理論と概念では捉えきれない問題が生じる。いまわれわれには、フランクの新説が試みたような新しい理論仮説と概念構築の試みが必要とされている、と思われる。世界システム論的視点による近代アジア史、とりわけ東アジアの歴史分析のための新視点や理論仮説が既に少なからず提案されている。本稿でこれらを検討する余裕がなかったが、筆者の今後の課題としたい。

本稿は、千葉商科大学の平成14年度学術研究助成を受けた共同研究「世界システム論とグローバリズム」（共同研究者、鈴木春二教授）の成果の一部である。